

## 家庭内摩擦と社会的役割の中の女性のアイデンティティー

### —— 現代文学からみた女性の状況～「OUT」に関する議論 ——

文教育学部教授 菅 聡子

日伊女性国際会議の三日目「文学セッション」は日本・イタリア両国から、女性表現者としてともに活躍されているお二人のゲストを迎え、対話の形で行われた。日本側のゲスト、桐野夏生氏は、1993年、『顔に降りかかる雨』で第39回江戸川乱歩賞を受賞、ミステリー作家として文壇に本格的に登場した。1997年には『OUT』で第51回日本推理作家賞を受賞、99年には『柔らかな頬』で第121回直木賞を受賞した。その後も『グロテスク』『残虐記』など、日本の現代社会とアクチュアルに関わる作品を次々と発表し、その問題意識の深さ、また男女をこえての多くの読者の獲得等、名実ともに現代日本を代表する作家の一人である。イタリア側のゲスト、エレナ・ジャーニ・ベロッチ氏は、1976年『What Are Little Girls Made Of?』（原題はイタリア語）で、ジェンダーの視点を先取りし、女性性がどのような社会環境において後天的に刷り込まれるのかを、具体的な例を示しつつ論じ、評論家としてデビューした。このラディカルな書物は一躍ベストセラーとなり、現在も売れ続けている。加えて、ベロッチ氏は小説家でもあり、さまざまな時代設定をとりつつ、女性たちの生の意味を問う作品を発表している。

この対話では、先述の『OUT』（イタリア語版タイトルは『東京の四人の主婦たち』）を具体的題材として、日本とイタリアの女性について、あるいは社会構造について、両国の現代社会が直面している種々の問題について、さらには女性の犯罪について、と多様な話題が展開された。加えて、ともに女性作家であるお二人から、女性がおもてを書くことの意味に加えて、作家としての創作の秘密をも明かすような執筆の背景が語られ、実りある対話となった。会場との質疑応答もふくめ、文字どおり意義深いセッションであった。